



心を育てる保育に求められる姿勢：特別の支援を必要とする子どもに焦点を当てて

著者	小竹 利夫
雑誌名	佐野日本大学短期大学研究紀要
号	29
ページ	91-101
発行年	2018-03-31
URL	http://doi.org/10.15109/00000116

心を育てる保育に求められる姿勢

— 特別の支援を必要とする子どもに焦点を当てて —

Attitudes required of childcare workers to nurture children's minds

— Focusing on children with special needs —

小竹利夫*

Toshio Kotake

Abstract:

Previously, the writer investigated attitudes which enable childcare workers to understand and respond to children's feelings, and to develop trust, self-confidence and peace of mind in children.

In this paper, using episodes from the teaching practice of 2nd-year childcare students at Sano Nihon University College, he continues this investigation into the kinds of attitudes childcare workers need to have in order to realize childcare that is responsive to children's feelings, and which nurtures their minds.

キーワード:

心もち、気持ちを受け止める、心を育てる、実習エピソード、保育者

I. はじめに

幼児教育の先駆者倉橋惣三^{くらはし そうぞう} (1882 ~ 1955) は、「心もち」(2008) と題した文章の中で「子どもは心もちに生きている」と述べている。そうであるならば、子どもを知るためには、子どもの心もち(気持ち)を知らねばならない。

保育所保育指針(2017)では、保育士が留意しなければならない保育の方法として、「子どもが安心感と信頼感をもって活動できるよう、子どもの主体としての思いや願いを受け止めること」を真っ先に挙げている。「思いや願いを受け止める」という言葉は、「気持ちを受け止める」「気持ちに寄り添う」等と言い替えることができる。筆者はこれまで、「子どもの気持ちを受け止め、信頼・

自信・安心といった心を育てる保育」を目指して、その目標を達成するために保育者に求められる姿勢を探ってきた。それらの成果の一つは、学生が書いた実習のエピソードに考察を加えて拙著「子どもや障害がある人の心の世界」(小竹、2016)にまとめた。

本稿では、その後の1年間に現2年生が書いた実習エピソードを手掛かりに、引き続き「気持ちを受け止め、心を育てる保育」を実現するために保育者に求められる姿勢とはいかなるものかを探った。

II. 実習エピソードと考察

1. 行動の奥にある気持ちを見る

子どもの何気ない行動の奥にも、子どもの大切な心が隠されている。津守真^{つもり まこと} (1980)

*佐野日本大学短期大学 総合キャリア教育学科 Sano Nihon University College Associate Professor

は、「行動は、子どもが心に感じている世界の表現である」と述べている。保育者が子どもの表現をどう理解するかで、その後の保育の展開が違ってくる。とりわけ子どもが小さかったり、^{しょうがい}障害があったりすると、一見不可解な行動を取ることがある。そのような行動にも必ず意味があり、気持ちが隠されている。表面的な行動だけを見ていては、その子を「困った子」と問題視して、戸惑ったり、叱責したりと的外れな対応をしてしまうことがある。一方、行動の奥にある気持ちを見ることで、その子を深く、肯定的に理解できるようになる。

行動の奥に隠された気持ち

【2年次の保育実習Ⅱ（保育所）】

4歳児クラスに配属された時に、発達障害がある男児A君と係わりました。A君は、保育者に言われることは、時間がかかってもしっかり最後までやり遂げる子でした。

朝の戸外遊びの時間、日差しが強かったので、合間に水分補給をするよう保育者は声掛けをしていました。私も園庭を見渡し、遊びに夢中の子どもには、しっかり水分を摂ってから遊ぶことを伝えました。

その中にA君もいて、A君は砂場で山を作っていました。私は「A君、1度水分補給をしてから、また遊ぼう」と声を掛けたのですが、A君は無言でした。「水分摂らないと倒れちゃうよ」と何度も声を掛けたのですが、A君は一生懸命、砂の山を作っていました。その間に、水分補給が終わった子どもたちが戻ってきました。一人の女兒が「先生どうしたの?」と声を掛けてきて、私は「A君が水分補給をしに行かないから心配なの」と答えました。そうしたら女兒は、「A君は山を守ってくれて

いたんじゃないかな?」と言いました。

私はA君の気持ちを受け止めて、もう1度「A君、友達が戻ってきたから大丈夫。A君も水分摂ってこよう」と声を掛けたら、A君は立って水分補給に行きました。

気持ちを言葉で表現することが難しくても、子どもには様々な理由があり行動していることが分かりました。また、子ども同士だと、言葉がなくても気持ちが通じることが分かりました。表現することが難しい分、保育者が子どもの気持ちになり考えられるような保育をしなければいけないと、改めて感じました。 【学生a】

上記のエピソードの中で、学生は「山を守っていた」という女兒の言葉でA君の気持ちに気づき、「友達に戻ってきたから大丈夫」とA君に声を掛けた。この瞬間A君と学生の気持ちが繋がり、A君は気持ちを分かってもらえた安心感から砂場を離れたものと推察される。女兒はA君と同じ世界を生きているからA君の気持ちに気付いたのであろう。子どもの気持ちに触れるには、保育者もまた子どもの側から子どもの気持ちを見ようと努めなければならない。

2. 色眼鏡を外して、子どものありのままを見る

子どもの気持ちを理解しようとする時、大人の思い込みや知識が邪魔をすることがある。津守(2001)は、「大人が自分の考えに固執してこだわっていたら、子どもの行動を表現として見ることはできない。理解は自分が変化することによってなされる」と述べている。固定観念を捨てて、真っ白な心で子どものありのままの姿を見ると、子どもの気持ちが見えてくることもある。

色眼鏡を外す

【1年次の教育実習（幼稚園）】

今回の実習では5日間5歳児クラスで実習をさせて頂きました。その際に、クラスの中で友だちに暴言を吐いたり、友だちが作ったものを壊してしまったりするB君という男の子がいました。

私は最初B君とどのように係わったりよいか分からず、遊んでいる様子を遠くから見ていました。その後の部分実習の読み聞かせでは「Bは聞いてくれるだろうか…」と不安に思っていたのですが、B君は一番前に来て真剣に、そして楽しんで読み聞かせを聞いてくれました。

5日間読み聞かせを行いました。5回ともB君は一番前で聞いてくれました。最初は「この子はトラブルの多い子」という色眼鏡を無意識のうちにかけてしまっていました。しかし、読み聞かせを楽しんでいる姿を見て、色眼鏡を外すととても感性が豊かな部分に触れることができました。

最終日には、お別れのあいさつで私が感極まって泣いてしまったときに、大きな声で「先生、今までありがとう！また遊びに来てね！」と一番に言ってくれました。

お別れのあいさつでもらったB君の言葉は私にとって宝物であり、私自身の保育の自信や成長に繋げることができました。次の実習では色眼鏡を外して子どもたちの素晴らしい面に触れていきたいと思います。 【学生b】

子どもの乱暴な言動やトラブルは目に留まり易く、「困った行動」として保育者の心に引っ掛かる。すると、知らず知らずのうちに「トラブルの多い子」「気になる子」と

いう色眼鏡を通してその子を見るようになる。どの子もキラキラ輝く宝物をいっぱい持っているのに、色眼鏡がそれを見えにくくする。上記のエピソードの中で学生がしたように、色眼鏡を外して温かい眼差しで子どもを見ることで、優しい気持ちや豊かな感性といった子どもの素晴らしい面が見えてくる。

3. 「困った行動」の奥にある不安な気持ちを受け止める

以下のエピソードが示すように、子どもの乱暴な言動の奥には不安な気持ちが隠されていることが多い。

自分を見て欲しい

【2年次の教育実習（幼稚園）】

C君（4歳）は、何か嫌な事があると、友達を叩いたり蹴ったりして泣かせてしまう気の強い子でした。私や先生が「何か嫌な事があったら手を出すんじゃなくてお口で言うんだよ」と声掛けしても、「うるさい」「みんな死んじゃえ」等と言って謝りません。しかし、しばらくして落ち着くと、「ごめんね」ときちんと謝る事ができました。不思議に思い、先生に尋ねると「C君の家は少し厳しい家で、悪い事をしたらC君はすぐに『ごめんなさい』って謝るみたいなの。C君には弟ができたんだけど、お母さんもお父さんも弟の方に目が行ってしまって、C君は寂しいんだと思うんだ。だから、友達にすぐに手を出したり、悪い言葉を言ったりして『自分を見て欲しい』っていう気持ちと、しばらくして『ひどいことをしちゃったな』っていう反省の気持ちで戦っているのだと思うの」と教えて下さいました。

私は、C君は乱暴な子なのではなく、

自分を見て欲しいという気持ちからそういう態度をとってしまうのだと思ったので、自由遊びや昼食の時など積極的にC君と係わるようにしました。すると、C君は友達に手を出したり、悪い言葉を使ったりあまりしなくなったので、子どもの気持ちに寄り添って接する事が大切だと改めて感じました。

【学生c】

保育者が子どもの乱暴な言動を注意したり叱ったりしては、子どもはあっという間に不安定になる。見落とされがちな乱暴した子の心の揺れを受け止めることで、気持ちは癒され安定する。

鯨岡 峻^{くじらおか たかし} (2010) も指摘しているように、たとえ子どもの乱暴な言動を受け入れることができなくても、子どもの不安な気持ちを受け止めることはできる。学生がしたように、「ちゃんと見ているよ!」と気持ちを受け止めてあげることで、子どもの気持ちは落ち着き、結果的に「困った行動」は減少する。

4. 言葉に頼らず、視線や表情や動きから気持ちを読み取る

子どもの目線の先に、子どもの思いがある。以下のエピソードが示すように、子どもが言葉を話さなくても、視線や表情や動きから気持ちを読み取ることができる。

表情から気持ちを読み取る

【1年次の教育実習（幼稚園）】

私が担当した年中クラスで、声を出さないDちゃんという子がいました。私は先生に、「Dちゃんは、私に緊張して話してくれないのでしょうか?」と質問しました。すると、「私はこのクラスを4月から担任していますが、Dちゃんの声聞いたことがありません。で

も、『声を出してみよう!』とは中々言えません。自分から何かのきっかけで話してくれたら嬉しいですね」とおっしゃっていました。私は話を聞いて、初めての経験で戸惑いました。しかし、Dちゃんは顔の表情で“楽シイ”“違ウ”等を表現したりしていました。私は明日からたくさん話し掛けて、心を開いてもらおうと目標を立てました。

次の日、Dちゃんはピアノを弾いていたので、「Dちゃん、ピアノとっても上手だねー」と話し掛けてみました。その時は、Dちゃんの表情は強張っていました。その後も、私はめげずにDちゃんに話し掛け続けました。すると、私のことをジーと見ていたので私は微笑みながらジーと見返すと、ニコッとしてピアノの陰に隠れました。私はその行動だけでもとても嬉しかったのですが、ピアノからピョコッと出てきて私のことを見ていたので、私も真似をして隠れてピョコッと出てDちゃんと遊びました。

4日目は、Dちゃんから私の手作りの名札を触りに来てくれました。一生懸命作って良かったなあと思いました。更に、給食を一緒に食べた時に、皆が私にお箸セットを見せてくれる際は、控えめにを見せてくれました。

5日目は、Dちゃんが一人でおもちゃで遊んでいたのですが、私も似たおもちゃと一緒に遊びました。すると、お友達が集まってきました。Dちゃんはとても楽しそうな表情で遊んでいたのですが、心の底から笑顔になってくれて嬉しかったです。

実習の5日間、Dちゃんが声を出すことはありませんでしたが、自然に私の隣にいたことが増えました。お別れの際は、ハイタッチを優しく何回もし

てくれました。

私は、目標だったDちゃんに心を聞いてもらうことができたと思いました。話してくれた方が気持ちが分かると思いますが、表情や動きを見るとだいたいの事は理解することができました。無理せず、自分から声を出してくれる日がきてくれると嬉しいです。来年、年長さんになっているDちゃんと話せたらいいなあと思いました。【学生d】

学生は言葉話を話さないDちゃんを目線や表情や動きを受け取り、心の会話を重ねた。気持ちが繋がると信頼が育ち、信頼が育つと子どもは一層はっきりと自分の気持ちを表現するようになる。このような言葉にならない目線や表情や動きといったコトバ^注によるやりとりの延長線上に言葉が生まれる。

注 本稿では、梅津八三(1967)の信号の定義を参考にして、ある人の行動を引き起こす他の人の行動及び構成物をコトバと呼んだ。目線・表情・動き、身振り・手話、写真・絵カード、文字・言葉等、気持ちが伝われば全てコトバである。

5. 子どもと同じことをやって心の世界を共有する

子どもが見ているものを一緒に見て、子どもがしていることを一緒にすることで、子どもの心の世界に近づくことができる。

子どもの真似をして共感する

【1年次の保育実習I (保育所)】

実習1日目と2日目に入った2歳児クラスに発達障害があるEちゃんという子がいました。

Eちゃんは他の友達と一緒に遊んだり、話をしたりすることがありませんで

した。実習が始まったばかりで、私自身、他の子と一緒に遊んだりするので精一杯でした。ですが、それでは実習をしている意味がないと思い、Eちゃんの様子もきちんと見ていくようにしました。自由遊びでブロックなどの玩具が用意されていても、Eちゃんはそれでは遊ばず、駐車場を出入りする車を見ていたり、ゴザの模様の上を歩いたりしていました。それで、私も同じように外を見てみたり、一緒にゴザの上を歩いてみたりしました。すると、Eちゃんが私の様子をチラチラうかがう姿が見られ、1日目は1度も目を合わせてくれませんでした。2日目は膝の上に座ってきてくれたり、私の周りにブロックを持ってきてくれたりしました。

言葉で話をすることはできなくても、Eちゃんの気持ちを共有することで、心はつながるのだと学ぶことができました。そして、その子なりの表現や気持ちを受け止め、共感していくことが大切だと思いました。【学生e】

上記のエピソードが示すように、子どもは大人には見えないものが見え、聞こえないものが聞こえる。子どもの心の世界が豊かであるから、大人はその世界に触れて驚嘆する。子どもは自分の心の世界に触れてくれる大人を信頼する。保育者は子どもの心に共感し、その世界と一緒に楽しむ姿勢が求められる。

6. 原因・理由を聞くよりも気持ちに共感する

子どもの何気ない行動の中にも、その子の大切な気持ちが隠されている。また、人が起こす行動には必ず原因や理由がある。ここで強調したいことは、気持ちと原因や理由は別物であるということである。倉橋

は、「心もちは心もちである。その原因、理由とは別のことである」と述べている。更に倉橋は「多くの人が、原因や理由を尋ねて、子どもの今の心もちを共感してくれない。……殊に先生という人がそうだ」と述べている。

以下のエピソードの中で学生は、気持ちと原因や理由を区別した上で、まず子どもの気持ちに共感することの大切さに言及している。

言葉よりも先に

【1年次の教育実習（幼稚園）】

年少クラスのある男の子が、歯を磨いた後、一人で泣いていました。タオルがかけてある所に立って泣いていることに気付き、「どうしたの？教えて」と声を掛けました。でも、何も答えずに泣いているだけで、私は困ってしまいました。すると、先生が来て下さって、「どうしたの？ 落ち着いたら話そうね」と言って、少しの間その子の頭をなでました。私は、泣いている原因を知ることその子の気持ちを理解しようとして、今泣いているその子の気持ちに寄り添ってあげることができていなかったと反省をしました。泣いている時に「どうしたの？教えて」と声掛けをしても、余計に子どもに負担をかけてしまっていることに気が付きました。

その後は、泣き止むまで私が抱っこをしました。落ち着いたから話を聞くと、自分のタオルが無かったことが原因だと分かりました。自分で鞆にしまったことを忘れていたようです。理由を聞けば、もっと早く解決できたかもしれません。でも、それでは子どもの気持ちに寄り添って対応できたかなと考えると、そうではないなと思いました。

早く泣き止んで欲しくて原因を知って解決しようと質問しましたが、それは子どもの気持ちに寄り添ったことにはならず、泣き止んでもらうことで自分が安心したかったのかなと思いました。

【学生 f】

上記のエピソードでは、泣いている原因や理由を聞こうとした学生に対して、先生は頭をなでて気持ちに寄り添う（共感する・受け止める）ことを優先した。先生の対応を見て、学生は原因や理由を知ることよりも子どもの気持ちに共感し、寄り添うことが大事だと気付いた。

けんかをした子どもに理由や原因を尋ねれば、「○○ちゃんがおもちゃを取った」とか「○○ちゃんが仲間に入れてくれなかった」とか教えてくれるかもしれない。しかし、それではその時の悲しい気持ちややさしい気持ちに共感したことにはならない。保育者は、まず子どもの気持ちに共感してあげなければならない。具体的には、「悲しかったね」「痛かったね」と声をかけたり、頭をなでたり、抱きしめたりといった対応が考えられる。そのような対応の結果子どもの気持ちが落ち着いた時には、多くの場合けんかの理由や原因はもうどうでもよくなっている。

7. 優しく接して、思いやりの心を育てる

子どもが自信を持って自分を表現し、自分らしく振る舞えることは、保育の目標の一つである。同時に、他者と協調して生きるために自分を抑えて相手を気遣えることもまた重要である。

次に、他者に対する思いやりや優しい心を育てるために保育者に求められる姿勢について考える。

教え合うこと

【2年次の教育実習（幼稚園）】

3歳児クラスでは、子どもたちは朝登園するとノートにシールを張って、荷物整理をしてから自由活動に入りました。

ある時、ある子がノートのどこにシールを貼ったらいいのか分からず「どこに貼るの？」と私に聞いてきました。私は、近くにあった日付確認用の日めくりカレンダーを指さし、「今日は○と○だから、○○日だよ」と教えました。その子は無事その日の日付の場所にシールを貼り、ノートを提出しました。

しばらくすると、今度は別の子もシールを貼る位置が分からず困惑していました。するとそこに、私に教えてもらってシールを貼った子が近づき、「今日は○と○だから、ここに貼るんだよ」と私に教えてもらった様に、その子に教えてあげていました。別の子に教えてあげた子はとても誇らしそうでした。私はその姿を見て、とても嬉しく感じました。

教わった事を教える事で、教えた子、教わった子、それぞれに学びがあったと思います。きっとその子は、自分が優しくされたから他の子にも優しくしたのかなと思いました。 【学生g】

上記のエピソードが示唆しているように、人から優しくされた子どもは、次に他の人に優しくすることができる。自分が周囲から大事にされているという確信が、周囲に対する信頼や周囲を気遣う優しい気持ちを育てる。子どもに思いやりの心を育てたいと願うならば、保育者は思いやりの心を持って優しく子どもに接することが求められる。

8. まず大人が子どもの気持ちを受け止める

1年次の実習では保育者と子どもの係わりを観察して学ぶことが中心だが、2年次になると自分で考えて積極的に動くことが求められる。その際、学生が独り善がりな判断で動くのではなく、その日の流れを理解した上で、保育者の意図やねらいといった考えに沿って動くことや、子どもの気持ちに寄り添って動くことが求められる。

保育者の考えと子どもの気持ちが一貫している場合、対応はさほど難しくはない（例えば、先生が絵本を読み聞かせしている時、子どもは椅子に座って静かに聞いている）。

一方で、保育者の考えと子どもの気持ちが一貫しない場合、対応に悩むことになる（例えば、先生が絵本を読み聞かせしている時に子どもがふらふら立って歩く）。この時、「座って聞いてほしい」という保育者の意向に沿って「座ろう」と子どもに伝える対応が取られることが多いが、それでは子どもの気持ちを大切にしたことにはならない。

以下に紹介するエピソードでは、子どもの気持ちを大切にしようとする学生の対応が語られている。

思いやりの心があるからこそ

【2年次の教育実習（幼稚園）】

朝の会が終わり、先生がこれから行う活動について話をしていました。すると、突然F君（3歳）が席を立ち、出歩き始めました。私はF君に対して、無理矢理席に座らせるのではなく「どうしたの？」と問いかけて、F君の気持ちを聞くことにしました。すると「○○が落ちている」と友達のG君の落とし物を拾おうとしてくれていました。それで「G君の物が落ちていたんだね。教えてくれてありがとう。でも今は先生が大切なお話をしているから、終わったら一緒に拾いに行こうね」と笑顔で

言うと、F君は納得した様子で「うん、わかった」と言って自ら椅子にきちんと座り先生の話を聞き始めました。

F君と係わって、改めてその子の気持ちに合わせた支援や声掛けをすることが大切であり、子どもの気持ちを尊重することが成長していく上で重要だと感じました。 【学生h】

学生がしたように、ただ「座ろうね」言うのではなく、「何故だろう？」と子どもの側から問い直すことが子どもの気持ちの理解に繋がる。F君が座らない理由を理解した学生は、友達を思いやるF君の優しい気持ちを「ありがとう」と受け止めた。このエピソードは、保育者が子どもの行動の理由を理解し、気持ちを受け止めることで、子どもは納得して保育者の言葉に耳を傾けるようになることを示唆している。

9. 心の事情を理解する

子どもは家庭で親から愛情をたっぷり受ける中で、自分が周囲に大事にされていることを実感して、自分に対する自信や人に対する信頼を育み、安心して生活することができる。しかし、様々な理由で親から十分な愛情を受けることができないと、子どもは自分の存在に不安をいだく。

ここでは、家庭環境が子どもの心に影響を与えたケースを通して、保育者に求められる姿勢を考える。

気持ちに寄り添う

【2年次の保育実習Ⅱ（保育所）】

4歳児クラスで夏の思い出の絵を描いているとき、「先生見て！」とHちゃんに声を掛けられたので見てみると、家の中にHちゃんがいる様子が描かれていました。私が「これはHちゃんのお家？」と聞くと、「うん、これはパ

のお家。これがパパで、これがI君（弟）だよ」と元気に説明してくれました。パパも弟も一つの部屋の中に描かれていましたが、一つだけ誰も描かれていない部屋があったので、「ここは誰のお部屋？」と聞くと、「これはママのお部屋！今は皆で住めないんだ！でも、帰ってくるかもしれないからお部屋はここにあるんだよ」と言いました。Hちゃんは少し寂しそうな顔をしていました。

本当は家族皆そろって暮らしたい気持ちを我慢しているのかなと思い、とても心が痛みました。それから、Hちゃんと話したりするときは、気持ちに寄り添いながら係わるようにしました。

【学生i】

上記のエピソードからも、家庭環境が子どもの心に不安や寂しさをもたらすことが分かる。保育者は、そのような子どもの気持ちに寄り添い、不安や寂しさを減らすことが求められる。

次のエピソードは、保育者が子どもの気持ちに寄り添い、愛情をいっぱい注ぐことで、子どもの不安や寂しさが癒されることを示唆している。富田富士也（1995）が指摘しているように、人間関係で傷付いた心を癒すことができるのもまた人間関係である。

子どもの気持ちに寄り添う

【2年次の教育実習（幼稚園）】

私が入ったクラスの子ではないのですが、11月の実習で仲良くなったJちゃんという子がいました。

今回の実習で、Jちゃんに久しぶりに会うと名字が変わっていて、色々あったのだと思い、その事には触れずにいました。

ある日、延長保育で外遊びをしてい

ると、Jちゃん自ら「Jちゃんね、年少の時は違う名字だったの。年長さんになったらどんな名前になっちゃうのかな」と寂しそうに言いました。

今、思えば「抱っこして、おんぶして」とたくさん甘えてきたのも、甘える存在が欲しかったからなのかなと感じました。私の家も、私がJちゃんと同じくらいの時に両親が離婚をしていて寂しい思いをしました。その時の担任の先生が、私の気持ちに寄り添って優しく接してくれたことが救いになったので、甘えさせてあげようと思い、たくさんJちゃんと遊びました。

【学生j】

10. 信頼関係を紡ぎ直す

心理学者のエリクソンは(1977)は、乳児期に達成することが求められる発達課題として、周囲や自分に対する「基本的信頼」の獲得を挙げている。それは、子どもの要求を特定の大人が十分満たしてあげることによって獲得される。一般的には家庭で親がその役割を担うが、何らかの理由で親が家庭で子どもを養育できない場合、乳児院や児童養護施設に入所して施設職員との間に信頼関係を紡ぎ直す子どももいる。

以下の三つエピソードは、施設において特定の大人と信頼関係を紡ぎ直すことの大切さと難しさを伝えている。

特定の人に甘える

【2年次の保育実習Ⅰ（乳児院）】

K君(3歳)は笑顔がとても可愛らしく、友達にも優しくできる男の子でした。ですが、遊びの時間などにほとんど私を独り占めするように甘えたり、私が違う子と接しようとするたびに膝の上に座ってきたり、私がK君の気持ちを汲み取ることができないとすぐ

に泣いてしまったりすることがありました。私はいろんな子と係わりたいたいと思っていたので、K君との係わりにとでも戸惑いました。

職員の方に質問をしたところ、「K君は乳児院に入ったばかりで、まだ担当の職員との信頼関係もできておらず、特定の人に甘えたいという気持ちが強い」ということを教えて頂きました。そして、「K君の気持ちに共感してあげ、『話を聞いてあげるよ』と愛を持って接することが大切である」と教えて頂きました。

次の日から職員の方に教えて頂いたことを心掛け、K君の気持ちに共感し愛を持って沢山話を聞いてあげるようにしました。すると、落ち着いて自分の気持ちを話してくれ、泣いてしまうことが少なくなりました。

家庭で生活ができれば特定の大人と毎日過ごすことができますが、乳児院では毎日職員の方が違うので、特定の人に毎日甘えられないという現実に関心が痛くなりました。毎日家族と過ごせるということはとても幸せなことだと改めて感じました。乳児院では一人の子どもにじっくり関わってあげることも大切だと学びました。

【学生k】

乳児院では、子どもが特定の大人との情緒的な強い絆(愛着)を形成するために、入所から退所まで特定の職員が養育を担当する養育担当制を採用するところが増えていく。施設職員が特定の子どもの親代わりとなって愛情を注ぐように、実習では学生もまた子どもの気持ちに寄り添い、愛情を注ぐことになる。

別れの不安**【2年次の保育実習Ⅰ（児童養護施設）】**

L君（6歳）は、とても元気で明るく面白い男の子でした。実習初日からL君は私に近づいてきてくれて、サッカーをしたり、料理の手伝いなどを一緒にしたりしながら、関係を深めていきました。

6日目の夜、私は遅番で職員の方から子どもたちを寝かせるよう頼まれて、L君と一緒に横になり、背中を優しくトントンしてあげました。私はトントンしながら「今日も一緒に遊べて楽しかった？」とL君に聞くと、L君は「うん！ お兄さんと遊べて楽しかった！」と言ってくれて、とても嬉しく思いました。しかし、その後L君が「お兄さんあと少しで帰っちゃうの？ そしたら俺のこと誰が見てくれるの？」と私に言ってきました。私はすぐに「職員のM先生とか見てくれるよ」と答えたら、L君が「じゃあ、もし職員の先生がいなくなったら、俺のこと誰が見てくれるの？」と聞いてきました。私はその時とても心が痛くなりました。何故かと言うと、L君は乳児院にいて、その後私が実習に行った児童養護施設に来たので、大人との別れを何度も経験してきたのです。私の場合、ずっと家族に支えられて生活してきました。L君は、いつもとても元気でも、心の中では不安な気持ちでいっぱいなのだと感じました。

親との毎日の生活や一緒にいる時間というのは、子どもにとっても私たちにとってもとても大切なことです。私が親になったら、当たり前のことですが子どもに愛情を注いで、子どもが不安な気持ちにならないようにしたいと思いました。

【学生1】

乳児期に特定の大人との間に情緒的な強い絆（愛着）を形成することは、その後子どもが自分や人を信頼して安心して生活を送るために不可欠である。子どもは信頼する大人を心の拠り所（安全基地）にして自分の世界を広げることができる。困った時にいつでも助けてくれる大人がいる、気持ちを立て直すために還る場所があるという安心感が、子どもの自立を支える。

しかし、乳児期に特定の大人との間に愛着を形成できないと、成長の過程で人に対する不信感や愛着障害を招くことがある。乳児院や児童養護施設では、子どもは実の親や施設の職員との別れを繰り返し、その都度新たな大人との間で信頼関係を紡ぎ直さなければならない。上記のエピソードに登場するL君も、何度か経験した辛い別れが、「また見捨てられるのではないか」という不安を招いたのではないか？ L君の不安を安心に変えるには、特定の保育者がL君の気持ちに寄り添い続けて確かな信頼関係を築くことが求められる。

新しい家族**【2年次の保育実習Ⅰ（児童養護施設）】**

私が小学生の女の子を担当した時のことです。次の日が運動会ということもあり、その夜は運動会での話をみんなでしました。その中の一人であるNちゃんは母親が運動会を見に来ることを笑顔で報告してくれました。

私は「Nちゃん良かったね。お母さんにたくさんかっこいい姿見せられるといいね」と声掛けをしました。すると、それを聞いていたOちゃんが、「まだ母親がいるだけいいじゃん。私は見に来てくれる人なんかいないよ」と言いました。

私は改めて施設の現状を突き付けられて、胸が苦しくなりました。そして、なんて声掛けをすればいいか分からず黙ってしまった私にOちゃんは、「でも、施

設では私のこと見てくれる人がたくさんいるから」と言いました。Oちゃんは強いなと感じました。

改めて、家族がいる生活は当たり前ではないということに気がきました。今も施設では色々な家庭事情を持った子がいます。そのことを忘れずに、これからも周りの人に感謝の気持ちを持って生活していきたいと思いました。

【学生m】

福田雅章(2012)が述べているように、施設の仕事の本質は、これまで家庭で当たり前
の世話を親から受けてこなかった子どもたちが信頼のおける大人(職員)と共に当たり前の生活を享受することである。上記のエピソードの中で、Oちゃんが発した「施設では私のこと見てくれる人がたくさんいる」という言葉から、施設で職員と子どもたちが新しい人間関係を築き、支え合って生活している様子が伝わってくる。たとえ血は繋がっていなくても、心が繋がれば新しい家族が形成される。

III. おわりに

心は見えないけれど、見えないものの中に大切なものが隠されている。学生は実習を振り返って、実習先で出会った子どもたちの心の世界を報告してくれた。学生が書いたエピソードは、いずれもささやかな報告である。しかし、小石を積んだケルンが登山者に道を示すように、ささやかな報告がいくつも集まれば、やがてゆるぎない事実となって子どもと係わる時の道標となる。

本稿では、現2年生が書いたエピソードを手掛かりに、「子どもの気持ちを受け止め、心を育てる保育」を達成するために保育者に求められる姿勢について考察を試みた。

主として特別の支援を必要とする子どものエピソードを通して「心を育てる」保育に大切な姿勢を探ったが、ここで取り上げた保育

者の姿勢は、どの子どもの保育においても共通して求められる姿勢であると考えている。

紙面の都合上割愛せざるをえなかったエピソードもたくさんある。その多くは「実習エピソード報告集(2017年度)一心の触れ合いを求めて-」(小竹、2018)に収録した。併せてご覧いただくと幸いである。

引用文献

梅津八三(1967)「言語行動の系譜」東京大学公開講座9『言語』東京大学出版会, pp. 49-82.

E. H. エリクソン(1977)『幼児期と社会1』(仁科弥生訳)みすず書房.

鯨岡峻(2010)『保育・主体として育てる営み』ミネルヴァ書房.

倉橋惣三(2008)『育ての心(上)』フレーベル館

厚生労働省(2017)『保育所保育指針』

小竹利夫(2016)『実習エピソードでつづる子どもや障害がある人の心の世界』川島書店.

小竹利夫(2018)『実習エピソード報告集(2017年度)一心の触れ合いを求めて-』佐野日本大学短期大学小竹研究室.

津守真(1980)『保育の体験と思索』大日本図書.

津守真(2001)「障害児保育とは」(大場幸夫・柴崎正行編『障害児保育』ミネルヴァ書房.

富田富士也(1995)『子どもたちの暗号』ハート出版.

福田雅章(2012)「園長のひとりごと」<http://blog.canpan.info/yohtokuen/> (2013年10月17日アクセス)

※プライバシー保護の観点から、実習エピソードに登場する人物名はAから順にアルファベット大文字で表記し、学生名はaから順にアルファベット小文字で表記した。また、内容を損なわない範囲で、必要に応じて一部書き改めた。